農業とランドスケープ

We are growing crops and nurturing landscapes

島津　幸孝　*Yukitaka SHIMAZU*

農業法人有限会社はげたかプラス（かわらけや）
Agricultural Corporation Hagetaka Plus (Kawarakeya)

ここは茨城県つくば市の東に位置する，その昔，土器屋（かわらけや）と呼ばれていた地域。私はこの町に住み，仕事をしています。そして，毎日をこの土地で過ごすうちに，この町が好きになりました。これは，この町を知らない，あなたに向けた手紙。

「イチゴの赤い実」しか知らなかった（笑）

私は，「かわらけや」というイチゴ狩りの観光農園を運営しています。私と農業の出会いは，全くロマンチックなものではなく，最初の興味は「農業従事者の6割が65歳以上」というものでした。筑波大学体育学群でサッカーを専攻していた私には，「対戦相手（同業他社）の6割が高齢者なら負けるはずがない」というように映ったのです。実際に始めてみると，光，土壌，温湿度，風，病害虫，季節…，考慮しなければいけない因子が大変多く，簡単なことではないとすぐにわかりました。初めてイチゴ農家を訪問した際，イチゴの育苗ハウスで，「イチゴはどこにありますか？」と質問して，周囲を笑わせました。私は，「イチゴの赤い実」しか知らなかったのです。作るのも初めてなら，売るのも初めて。「畑でイチゴを買う」という人の流れを作るのは大変なことでした。

「畑」という磁場

直売を始めた頃から，「新鮮さ」が顧客に保証できる唯一の価値ではないかと考えるようになりました。そして5年前から，イチゴを最も新鮮に提供する方法として，イチゴ狩りを始めました。「新鮮なイチゴでお腹を満たしたら，食べた後のヘタをヤギさんにエサとしてあげる」というシンプルなコンテンツです。直売でもイチゴ狩りでも，毎日お客様から評価を受けます。決して楽なことではありませんが，お客様の反応から，イチゴ狩りというサービスの様々な価値を発見しています。ひとつは，工場見学的な楽しみ。当然ながらビニルハウスの中はイチゴを作っている最中です。イチゴを食べながら，イチゴができていく過程を目の当たりにすることができます。イチゴの葉や白い花，熟す前の黄緑色のイチゴ，ミツバチの訪花，高畝，黒マルチ，内張り，炭酸ガス施用装置，外気より温かい室内…。生産者にとって当たり前のことが，お客様にとっては初めてのことばかり。また「水や肥料はどうやってあげているの？」，「この機械は何のため？」，お客様にとっては，生産者と会話することも楽しみのひとつのようです。お客様に「美味しい，楽しい，また来たい」と思ってもらうにはどうしたら良いのか？　もっと気軽に畑に来てもらうにはどうしたら良いのか？　イチゴ狩りを始めたことで，「場づくり」という意識を強く持つようになりました。「農業」というと，土を耕して種をまくといった生産現場を想像されることが一般的です。私はそれに加えて，もう少し大きな広がりを感じています。そのひとつが，先に述べたイチゴ狩りのエピソードに見られる，「作る」「売る」「楽しむ」「交わる」といった「農工商観（農業 / 工業 / 商業 / 観光）をまるごと提供」できるところです。それら全てを畑で生み出すことができ，それらを組み合わせることで，人を惹きつける磁場になると考えています。

農業とランドスケープ

その先に，「地域性の創造」というさらなる広がりを意識し始めています。農業は人為で人工的な営みですが，どの瞬間においても自然と向き合っています。そして地域と自然は，切っても切り離せない存在です。今回の寄稿依頼をいただいたとき，ランドスケープとは無縁だと思っていた私は，率直に，何かの間違いでは？　という気持ちでした。Wikipedia によると，ランドスケープ（英語：landscape）は，

> 景観を構成する諸要素。
> ある土地における，資源，環境，歴史などの要素が構築する政治的，経済的，社会的シンボルや空間。
> または，そのシンボル群や空間が作る都市，場所や地域そのもの，地域環境。

と記されています。少し乱暴な捉え方かもしれませんが，私はその土地で農業をすることが，つまりその土地や生活，そこに暮らす人と向き合うことが，ランドスケープそのものかもしれないと感じました。実際，その地域に向き合い，寄り添っていけば，地域性に繋がるのでは？　という感触を持っています。冒頭に述べたように，この地域は昭和30年まで土器屋（かわらけや）と呼ばれ，この土地の土を使って瓦を焼いていたそうです。営業を始めた頃，常連のお客様が，「ここのイチゴが美味しいのは，君の技術ではなくて，土が良いからですよ。

瓦を焼くような肥沃な土地のおかげです。」とよくおっしゃっていました。そのエピソードがとても印象的だったので，数年前からこの土地の歴史を少しずつ調べています。桜歴史民俗資料館（つくば市金田）によると，この地域の土は，氷河期時代に北関東の山々が噴火した際に降り積もった火山灰の上に桜川から氾濫した土砂が堆積してできたもので，鬼怒川地域に比べると１万年弱早く干上がったとのこと。また火山灰土壌の下にある礫層が非常に深い（100m 程度の深さ）ことから，水田利用が主である氾濫平原としては，特異的に，農業生産に向く土地であることがわかりました。このことを知ってから，この地域では，農業生産をすることが最も良い土地利用ではないかと考えるようになりました。この土地で継続的に農業生産をするにはどうしたら良いか？　元大分県知事の平松守彦さんが提唱された「一品一村運動」の精神は，「自主的な創造活動のなかで，地方の特殊性（ローカル）に徹すれば徹するほど，世界的（グローバル）になっていく（『グローバルに考えローカルに行動せよ』平松守彦著：1999 年）」というものです。その土地に合った作物や品種を選び，その土地に合った作り方をし，その土地を活かした商売を展開しながら，全日本的，世界的評価に耐えられる特産品を作っていく。ここの土壌の歴史に着目したことは，その第一歩と言えます。適地適作を意識しながら地域の農地を継続的に利用できれば，水田や畑そのものが，常に開かれた工場やショーケースとして，建築物などと同じように，地域性を獲得していくのではないかと考えています。

また，小さいながらも生産や営業をしていると地域の様々なニーズを知ることができます。ここ最近は，定年退職したお客様やコロナの影響でアルバイトや職を失った学生や留学生，主婦の方から「働かせてくれないか？」という要望が増えてきました。また近所の子どもたちは，「雨の日に遊べる場所が欲しい」「安心してスケートボードができる場所が欲しい」と話していました。これらのことから，子どもに限らず大人も，できれば歩いて行けるところに，安心して学び続ける場所があると良いなと感じています。生産や加工，販売は仕事やアルバイト，学びの対象に，また畑は遊び場に，ビニルハウスは雨よけになります。まだまだ気がつけていない機能もあるでしょうし，異業種のサポートを追加することもできるでしょう。全てを一度にということは難しいですが，それらをひとつひとつ組み合わせていけば，地域のニーズを解決できるかもしれません。都市圏と違い，つくばで暮らす人の多くは生活圏に仕事があります。加えてつくばには，数多くの国の研究機関や企業の研究所があり，大学や大学病院もあります。地域に向き合う素地とテクノポリスという両方のポテンシャルを兼ね備えています。つまり，この土地に合った特産物や必要なものやことを研究開発していくピースは，すでに十分に揃っているのです。

思えば，大学時代に経験したイングランド遠征では，サッカーが大きな磁場になっていました。どんな小さな町にも，素敵なスタジアムがあることに驚きと憧れを感じました。滞在中，スタジアムには，試合を行う場所であるだけでなく，遠方から来るアウェイチームの選手やスタッフ，クラブ関係者をもてなすという役割があることを知りました。実際遠征中も試合後はラウンジに招かれ，ホームチームの選手たちと地元の食材を使った料理を囲み，ビリヤードを楽しみながら，親睦を深めました。また週末の試合には，必ず地域の子どもや大人たちが観戦に訪れていました。スタジアムという場所が，サッカーを契機にいろんな広がりを生み，スタジアムサッカーが人々の暮らしに，とても自然な形で溶け込んでいるように感じました。農業でも同様の広がりやその結果として地域性を生み出せると考えています。その土地の水田や畑，農産物が，よりその土地の暮らしや風景に調和するような，農業がそんな存在になるように。

私はこの町に住み，仕事をしています。そして，毎日をこの土地で過ごすうち，この土地と向き合ううちに，この町が好きになりました。一人でも多くの地域の子どもや大人が，そう思うことを夢見ながら，今日はこの手紙を書いています。このラブレターを読んだあなたがこの町に足を運んでくれたとき，何かしら感じたことを聞かせてもらえると嬉しいです。きっとその声が，この地域のランドスケープをまた新たなものにしていく，ひとつの契機になると思います。

（略歴）1979 年大阪府生まれ。筑波大学体育専門学群卒業。2002 年就農。2006 年に有限会社はげたかプラスを設立。現在はイチゴ狩りの観光農園として，イチゴや加工品の販売を行う。2019 年には，キッチンカーを使った PR 事業が茨城県の「儲かる農業ステップアップ事業」に採択される。つくば霞ケ浦りんりんロード沿いやイベントにて，イチゴジャムを使ったかき氷などを販売している（写真－１）。

写真－１　キッチンカーでの営業